

新潟の未来

相崎市立高柳中学校一年 若山 陽太

すべてが暗くなるのは一瞬だ。十月二十三日五時五十六分。た。た数秒で、家の中は暗くなり、ぼくの頭の中は真。白になった。聞こえるのは、棚から落ちる物の音だけ。揺れがおさまり顔を上げてみる。何も見えな。い。母が口ウソクを持。てきた。そして、や。と家の様子がわ。か。た。あまりにも悲惨な光景だ。た。た。家の中は、メチャクチャだ。た。外

は、近所の人達の声しか聞こえない。また、揺れが来た。そしてまた。

何回揺れたのかは、わから。ない。父が帰。てきた。揺れてから、約一時間後に。父が言。うには、市街地の方もこ。ちと同じ様子らし。い。ともかく、一度外に出た。外は、何事もな。か。たかのように、静まりかえ。ていた。何か食べる物を買。いに、市街地に向。か。た。行く途中の道路は、崩。れてい。る所が数。ヶ。所あ。つ。た。

コンビニについた。そのコンビニは、自家発電で明かりはついていていた。中は、お酒のビンが割れていた。いくつか、すぐ食べられるものを買った。そのコンビニに来ていたある男の人がこう言っていた。

「十日町は、道路が波を打っていてだめだ」。ぼくは、驚いた。高柳よりも、もっとひどい所があるなんて。

家に戻る時に、カーラジオでこんな事が流れていた。

震源は小千谷で、最大震度は六強です。もう言葉も出なかつた。

翌日の二時頃、電気が復旧した。テレビを見て、ぼくは驚いた。道路や崖は崩れ落ち、新幹線は脱線し、多くの家が倒壊していた。多くの人が亡くなり、十万人の人々が避難生活を送る儀無くされていった。救援物資が行き届いていない所もある。

ぼくは思った。「新潟に未来があるのだろ
うか？」と。